

軽度発達障害者の障害の重複の様相

宮本正一

(岐阜大学教育学部)

key words : 特別支援教育、アセスメント、障害の重複

I. はじめに

文部科学省から通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査結果が発表され、特別支援教育のガイドラインも公表された。

本研究の目的は、岐阜県 S 市において文部科学省の調査と同様の調査を実地し、障害の重複の様相を詳しく検討したものである。

II. 方法

(1) 対象 岐阜県 S 市にあるすべての小学校 11 校と中学校 6 校で、クラスを担任している教師 207 名に、自分の担任している子ども全員について回答を求めた。

(2) 調査票 平成 14 年に文部科学省が実施した全国実態調査と同様の質問項目を用いた。学習面(「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」)「聞く」「話す」等の 6 つの領域(各 5 項目)計 30 項目。行動面は「不注意」「多動性・衝動性」についての、それぞれ 9 項目、計 18 項目。「対人関係やこだわり等」については 27 項目。

(3) 実施時期 2003 年 9 月

(4) 手続き

調査は学級担任が教務主任等と相談しながら、自分が担任するクラスの子ども一人一人について、パソコン上で回答を求めた。

III. 結果と考察

まず学習面(「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」)の 6 領域の内、少なくともひとつの領域で該当項目が 1 2 ポイント以上を示した場合は LD の可能性があるとして判断する。表 1 は LD と判断された子どもの割合である。

表 1 LD と判断された子どもの割合 (%)

領域	聞く	話す	読む	書く	計算	推論
男	0.8	1.0	1.0	1.7	1.5	0.7
女	0.2	0.3	0.2	0.2	1.6	0.2
全体	0.5	0.6	0.6	0.9	1.5	0.4

「計算する」を除いて、男子の方が女子より高い値を示している。男子の「書く」は特に値が高い。女子は「計算する」が一番高い。

これらの 6 領域はどのように重複しているのだろうか。図 1 は、重複して判断された領域の数を示したものである。縦軸の目盛は人数であるが、% に換算すると 70 人が約 2% である。したがって男子(女子)は 1.9(1.3)% が 1 つの領域で、1.6(0.6)% が 2 つ以上の領域で LD と判断されていた。

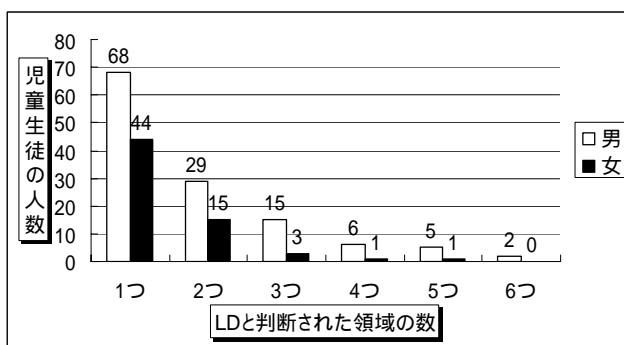


図 1 LD と判断された領域の重複の程度

次に行動面の「不注意」「多動性・衝動性」について ADHD と判断された割合と、「対人関係やこだわり等」について高機能自閉症と判断された割合を表 2 に示した。

表 2 ADHD, 高機能自閉症と判断された割合 (%)

	不注意	多動性・衝動性	対人
男子	2.3	1.2	0.7
女子	0.4	0.1	0.2
全体	1.4	0.6	0.5

表 3 に、これら 9 領域の障害の重複の様相を示した。例えば「計算」LD の確率 0.015 であり、「不注意」ADHD の確率は 0.014 である。この両者が全く独立に生じると考えると、その同時確率を求めればよいことになる。すると $0.015 \times 0.014 = 0.00021 (0.02\%)$ となるが、実際は 0.4% の出現確率を示している。つまり 20 倍の確率になる。表 3 の中で一番小さい値の組み合わせの場合でも $0.005 \times 0.004 = 0.00002 (0.002\%)$ となるが、実際は 0.1% の出現確率を示している。つまり 50 倍の確率になる。つまりこれら 9 つの障害がかなりの高い確率で同時に生じていることが分かる。

表 3 9 領域の重複の様相 (%)

領域	A 聞く	B 話す	C 読む	D 書く	E 計算	F 推論	G 不注意	H 多動衝動	I 対人
A	0.5	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.1	0.2
B		0.6	0.2	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.1
C			0.6	0.3	0.3	0.1	0.2	0.0	0.1
D				0.9	0.3	0.2	0.4	0.1	0.1
E					1.5	0.3	0.4	0.1	0.1
F						0.4	0.2	0.1	0.1
G							1.4	0.4	0.3
H								0.6	0.2
I									0.5

表 4 LD と ADHD の障害の重複の様相

	ADHD でない	ADHD である	全体
LD でない	96.3	1	97.3
LD である	1.9	0.8	2.7
全体	98.3	1.7	100

表 4 に、LD と ADHD の障害の重複の様相を示した。LD の確率 0.027 と ADHD の確率 0.017 は、その同時確率を求めると $0.027 \times 0.017 = 0.000459 (0.05\%)$ となるが、実際は 0.8% の出現確率を示している。つまり 17 倍の確率になる。同様に LD と高機能自閉症の同時確率は、 $0.027 \times 0.005 = 0.000135 (0.01\%)$ となるが、実際は 0.3% の出現確率を示している。つまり 22 倍の確率になる。

最後に ADHD と高機能自閉症の重複であるが、驚いたことに、高機能自閉症と判断される 34 名すべてが ADHD と判断されていた。つまりこの 2 つの障害は全く弁別されていないことが分かった。

(Masakazu Miyamoto)